



今年度がスタートし、2ヶ月が過ぎました。子どもたちは学校生活にも慣れ、意気揚々と元気に登校しています。しかし、まだ新しい環境に慣れずに「登校したくないなあ」と思っている子どももいるのでしょうか。そんな子どもにどんな言葉をかけてあげばいいのでしょうか。考えてみましょう。

涙を流すことは人生を深める道である

荒崎良徳さん（雲龍寺住職）には、登校拒否の体験がある。

小学五年生だった。毎朝、家を出る。だが、足は学校に向かない。人目がある表通りを避け、裏道から裏道へとのか猫のようにさまよい歩いた。

その時の侘しき、寂しき、情けなさは、いま思い出しても胸が締めつけられるという。

養護施設・林鐘園の園長を務めたとき、登校拒否の子を預かることになった。荒崎さんはその子と二人だけで話をした。

「学校に行かないで、どこにいたんだ？」

子どもはポツリと答えた。

「町外れの土管の中にいた」

途端に荒崎さんの胸に、学校に行けなかった日々の侘しき、寂しきがせつなく突き上げてきた。

荒崎さんは思わず言った。

「そうか。辛かったなあ」

子どもは一瞬、驚いたように荒崎さんの目を見た。と、にわかに荒崎さんの手をつかみ大声で泣きだした。堰を切ったような、張り裂けるような泣き声だった。

とめどもなく泣きじゃくったあとで、子どもは言った。

「おれ、林鐘園でがんばってみる」

人にはだれでも泣きたくなるような思い出や体験が必ずあるのではないか。泣きたい思いに溢れているのが人生というものかもしれない。

生理学的に言うと、涙があるから眼球は潤い、ものを見ることができるようなのだという。人生もまた涙することで方向を見定め、その長い旅路を歩いていくことができるのだろう。

「常に悲感を懐（いだ）きて心ついに醒悟（せいご）す」 — 釈迦の言葉である。「常に深い悲しみを胸の奥に秘め、その悲しみを大切に歩み続けるとき、人はついに悟りに目覚める」という意味である。

涙を流すことは人生を深める道でもある、ということ、この言葉は教えてくれている。

「小さな人生論 致知出版社」

これまで「一度も泣いたことはないよ、涙なんか流したことはないよ」と言われる人はいないでしょう。悲しく辛い出来事があったり、悔しいことがあったりして涙を流した経験は誰にでも必ずあるものです。

生きてると悲しいこと、辛いこと、悔しいこと、寂しいこと等、さまざまなことに出合います。本当は、誰もがこのような経験はしたくないものです。しかし、そのような辛い経験をして、乗り切ったからこそ、人の気持ちに寄り添うことができる人間になれるのだと思います。

荒崎さん自身が登校拒否を経験したからこそ、子どもの苦しみが理解できたのです。子どもにかけたひと言、「そうか。辛かったなあ」という言葉で子どもは立ち直るきっかけをつかみます。私たちの周りに辛い思いをしていそうな子どもがいたら、荒崎さんのような声かけができる大人になりたいものです。

「常に悲感を懐きて心ついに醒悟す」 心に刻んでおきたい言葉です。

文責＝青少年育成センター指導員 藤村